

館長小野村先生を悼む

中央図書館運用課長 森上 修

わたくしたち館員に中央図書館長小野村資文教授の訃報が伝えられたのは過ぎる6月13日の夜半のことであった。とても信じがたい、あまりにも突然の悲しい知らせにしばし呆然としてわが耳を訝った。

葛城山麓の下田のご自宅でやすらかに先生は逝かれた。幽明すでに相隔たり、はや五十日祭も當まれようとするころおい、ありし日の先生を偲びいささかここに追慕の筆を執らせていただく次第である。

想えば私がはじめて小野村先生の警欵に接したのは今を遡る35年前のたしか昭和26年4月のことであった。当時、先生は近畿大学法学部へご出講のかたわら、附属高等学校普通科の各学年で英語選択科目の授業を受け持たれていた。当時、私ども附属高等学校第1学年の普通科組は、外国語の単位として必修英語のほかに(A)英語講読、(B)ドイツ語、(C)中国語のいずれか一つを選択履修することになっていた。先生の授業を受けることになった私どもの(A)グループは15名であったが、その最初の授業にあたって時の三代目校長加藤光雄先生が壮令の小野村先生と共に教室へ見えた。

校長がわざわざ教室へ出向いてくるというのはきわめて異例のことで、何事かと一同は頸をかしげた。「本日より君達の授業を担当して下さることになった小野村先生である。先生は本校の創設者・初代校長小野村胤敏博士の御曹子で、天中、大高、京都帝大出の秀英であられる。過分の俊師と仰いで、粗相のないように」校長はこう紹介して教室を出られた。「いま、ご紹介をいただいた小野村です。固くならず、これからの一年間まあ楽しく愉快にやりましょう」これが教室での先生の第一声であった。

先生は授業にはご自身で編刊された Reader を用意され、巧みな話術でわれわれ悪童どもを引きつけながら実に懇切に教えられた。授業での先生の板書の筆跡はまことに麗しく深く印象に残っている。先生の愛称は「天ちゃん」(Emperor) で通っていたが、これは清楚な身嗜みとその容姿から、敬仰する先輩の誰れかがそう命名したのだという。

先生との最初の出合いは、このように師弟の関係から生まれたのであるが、そののち昭和46年6月からはご縁があって私は中央図書館長としての要職にあられた先生のもとで不肖ながら15年間、お仕えする光榮に浴することになったのである。

先生は平素、頗る勤勉であられたから、ご病気のとき以外は余程のことがない限り、たいいてい一度は館にお見えになり、館長室で何かとご多忙な公務を遂行され、これが在任中の18年間、ずっと続いた。

これ程も長らく館長職を務められて館の運営に没頭せられた方は館界でもそう多くはないで

あろう。館長としての先生は常にソフトであり、館務全般をスマートに的確に統轄された。

ときとして、私共は先生の頭の閃きと回転の早さに戸惑い、ご指示の真意を誤まるとんだしくじりを重ねご迷惑をお掛けすることも多かった。しかし、そのような時でも先生は叱責されることはついぞなく、ただ齟齬の点のみをさらりと諭されるだけであった。

「従容せまらずして自得を俟つ」というのが私共に対する先生の指導方針であったろうか。先生なきあと、なお脆薄な私共が今後、この深遠なご遺旨にどれほどお応えできるかはなほだ心もとない限りである。

ところで、わが中央図書館の蔵書としていささか誇るにたる取書の一つに西洋古版本のコレクションがあるが、これは先生が館長にご就任以来、営々と今日までほとんど独力で蒐集に努められたもので、その点数はおよそ数千にもおよぶであろう。いずれ専門家に嘱してその解題目録を上木し、その全容を世に紹介される筈であったが、ご計画の一步手前で逝かれたのは洵に残念なことである。

このほか、先生はまた館長としての独自の立場から、わが国の地方史に関する資料の蒐集にも意を用いられた。全国の本屋目録や新刊書案内類にくまなく目を通され、購入書目を自ら抄写、蓄積されたと聞く。この地方史コレクションはすでに相当膨大な分量に達し、現在では全国五指のうちに数えられる程に充実しているが、これも先生の不断の熱意とご努力が実を結んだものといえる。

それから、もう10年ほど前のことになるが、先生はそのころのある期間、館長業務の業余の時間に館蔵資料をフルに活用して熱心にある事柄の調査、研究を続けられたことがあった。この時の先生は館長としての特権を濫用されることなく、あくまでも一利用者としての立場を固く守られていた。なかなかできることではなく、さすがと感服したものである。

確か昭和49年前後の3年間ほどであったとおもう。それはご自分の専攻分野とは異なる国史文献に関するものでかなり熱の籠ったご勉強ぶりであった。そのころ、先生はよく3階の閲覧室へ姿を見せられ、目録コーナーで自らカードを検索しながら盛んにメモをとられて書庫へ向かわれるのが日課となっていた。当初は私共も先生が国史資料を渉猟されていることなどまったく存じあげなかった。

「お捜し物ならお手伝いします」と申し入れると「いやあ、ちょっと脇道の勉強でねえ、マイペースでやります」とおっしゃり、書庫で何時間も過ごされることが多かった。真夏のある日、偶然にも書庫内で、国史関係の資料をあれこれと物色なされている先生のうしろ姿が目にとまった。ワイシャツの背中あたりが汗でびしょりと濡れていた。踏み台の上段に30冊ばかりの専門書が積み上げられていたので、「たくさんあるようですから、一まづ閲覧室へ運びましょうか」と思わず声を掛けてしまった。「いやあ、こっそりやるつもりが判かってしまったねえ。実はしばらく歴史の勉強がしたくて」と徐にこちらを振り向かれ、「いや、どうもありがとう。もう少し続けますから」と軽く会釈された。

後に知ったことであるが、そのころ先生は佐原系小野村氏の家長として、その家系をまとめ

られる決心をされ、その準備のために基本的な国史文献の調査を始めようとなさっていたのである。こうして先生は次々と館蔵資料を博捜され、丹念にノートをとられたようで、やがて国史分野でも相当な書誌通になられてしまった。先生の書庫通いが始まって2年ほど経ったころ、先生から時折、異体字や篆文の難読字について意見を求められることがあったが、おそらくこの時はお家累代の文書や碑碣類の読解にご苦労をなさっていたのであろう。

やがて家系の調査、研究もいよいよ佳境に入り、私も蔭ながらそのご完成を願ったことであった。昭和52年の早春、ついに年来のご苦心が稔って、先生はB5判、310ページにのぼる大著「小野村氏家譜並家系調査記録」を限定出版された。装幀は佐野輝義氏が手掛けられ、糸かがり布表紙のなかなかに贅を凝らした美装本であった。

私の知る限り、専門外の分野にまでこれほどのエネルギーを投入された図書館利用者はこれまで先生をおいて他におられなかったとおもう。マナーの良い模範的な利用者としての館長のことをいつまでも記憶にとどめておきたい。

館長としての先生がその職責上、この数年来もっとも気に掛けておられたのは書庫スペースの拡張対策のことであった。年を追って増加の一途をたどる蔵書量に対して、すでに書庫内が満杯状態に近くなっていることを充分にご承知であられた先生は、このことを最後まで苦慮され、胸中あれこれと解決のための施策をめぐらされていたようである。

今年の4月下旬、館長室へ伺った私に先生は「積層書庫の件だが、昨年に増設した旧34号館書庫を含めてあと何年もつかねえ」といつになく厳しいお顔で質された。「やりくりして、あと3年でしょうか」とお答えすると、先生はしばらく無言のあと「いよいよ行動開始の時期が来たかねえ。再度、収納状況を精査して正確な数字を報告してほしい。夏明けからは忙がしくなるよ」とぼつりとおっしゃった。

そのとき運用課の閲覧係では各階書庫内の大移動を実施中で、移動完了後の分野別収容状況の詳細をその時点で適確につかむことはきわめてむづかしかった。

5月の連休が明け中旬すぎになって、学外から先生の電話が入った。「書庫調査の件、できましたか。少し急いで書類にして報告して下さい。」このように性急な先生からの督促はめずらしく、はたと困ってしまった。これ程までに先生が書庫問題に腐心されていたとは。止むなき事情とは言え、課せられた大事な宿題を放置していたことを後悔した。

この時ばかりは、先生からはじめてかなりきついお叱りを受けたが、こんなにも真剣にこの問題をお考えいただいていたのに、叡慮を覚れず、まったく不徳のいたすところ、本当に頭の下がる思いがする。こうした館の難題をいくつか抱えて先生は5月の下旬、病床につかれ、再起を期されながらついに不帰の人となられた。振り返れば、長らくの間、先生には何かとご指導をいただき、また実に多くの教訓を得ましたことを泉下の先生にお礼申し述べますとともに、今後の館の発展のためにもどうかご加護をお願いいたします。俄にとわのお訣れをしなければならず、哀惜のあまりに腸断つ思いです。

さようなら先生、寧らかに眠り下さい。